

植木センターだより

令和8年 第1号 (Vol.154)



モクレン(シモクレン)

モクレンは、モクレン科モクレン属の落葉低木から小高木です。
原産は中国南部で、日本を含む世界各地で観賞用として植栽されています。
花の形は蓮華に似ており、香りは蘭に似ていることから木蓮とよばれます。
花期は3月から4月頃で、花が紫色であることからシモクレンともよばれます。
花の特徴は、上向きに直立して開花し、一般的に全開しません。また、開きははじめのころは日当りの良い方が早く生長するため、先端部が北の方角に向くのが目立ちます。

目次

県内市場動向	1
調査研究の現場から（結果報告）	
「高齢化・大木化した緑化木の問題点と管理方法について」	3
緑化木の主要害虫 No.39（ヘリグロテントウノミハムシ）	9

県内植木市場における取引動向

愛知県植木センターでは、1986年から県内の植木市場（井堀・矢合・福地〔現在は廃止〕）において、主に地元から出荷される緑化木を中心に現在31品目（一般植木、株・玉物、生垣用樹）の取引量を春期（2月～4月）と秋期（10月～11月）に調査しております。

今回は、2025年春期・秋期の取引量の概要を紹介します。

I 春期

1 全体取引量〔図－1〕

今期の全体取引量は約13.3万本で、前年同期（約13.3万本）とほぼ同数で推移しており、前年同期比ほぼ100%となりました。全体取引量は2010年以降減少傾向が続き、2016・2017年にはわずかな増加に転じたものの、再び減少傾向となっています。

2 用途別の取引動向

一般植木の取引量は約5.0万本で、前年同期（約4.9万本）より約0.1万本増加しました。自然形ではカエデ類が多く、続いてシマトネリコ、キンモクセイ、ヤマボウシで前年からシマトネリコが減少し、カエデ類、キンモクセイ、ヤマボウシが増加しました。仕立物ではイヌツゲが多く、続いてクロマツ、イヌマキで前年からイヌマキ、クロマツが減少し、イヌツゲが増加しました。

株・玉物の取引量は約6.5万本で、前年同期（約6.7万本）より約0.2万本減少しました。主要樹種はサツキで、ドウダンツツジ、ツツジ類が続いています。生垣用樹は約1.7万本で、前年同期（約1.7万本）とほぼ同数でした。取引量の多い品目は、サザンカとイヌマキで、両種で全体の約87%の取引量となりました。

3 取引量上位の動き〔表－1〕

調査対象の取引量の上位10品目について、前年同期はサツキとオタフクナンテンが上位を占めていましたが、今期はオタフクナンテンにかわり、ドウダンツツジ、カエデ類が順位を上げ、一方、オタフクナンテン、シマトネリコは順位を下げました。

II 秋期

1 全体取引量〔図－2〕

今期の全体取引量は約7.3万本で、前年同期（約7.8万本）より約0.5万本減少しました。全体取引量は2008年以降減少傾向で、前期の取引量は2008年に比べると約29%まで減少し、今期も減少傾向です。

2 用途別の取引動向

一般植木（自然形・仕立物）の取引量は約2.6万本で、前年同期（約3.2万本）より約0.6万本減少しました。自然形では、シマトネリコ、ヤマボウシ、カエデ類、キンモクセイが多く、前年からシマトネリコ、カエデ類、キンモクセイは減少しました。仕立物では、クロマツ、ウバメガシが増加したものの、イヌツゲ、イヌマキ、キャラボクの取引数量は低調のままです。

株・玉物の取引量は約3.8万本で、前年同期（約3.2万本）より0.6万本増加しました。株・玉物の大半を占めるオタフクナンテン、サツキが増加し、ツツジ類、ドウダンツツジ、イヌツゲは減少しました。生垣用樹の取引量は約0.9万本で、前年同期（約1.4万本）より約0.5万本減少しました。生垣の主要樹種であるサザンカ、マサキは前年より減少し、イヌマキは増加し

3 取引量上位の動き〔表－2〕

調査対象の取引量の上位10品目では、オタフクナンテン、サツキ、シマトネリコが上位を占めており、イヌマキ（生）、ヤマボウシが続いています。オタフクナンテン、サツキ、ヤマボウシの取扱量が前年より大幅に増加し、一方、サザンカ、ソヨゴの取扱量が大幅に減少し順位を下げており、全体的には低調のままです。

図－1 春期取引量の推移

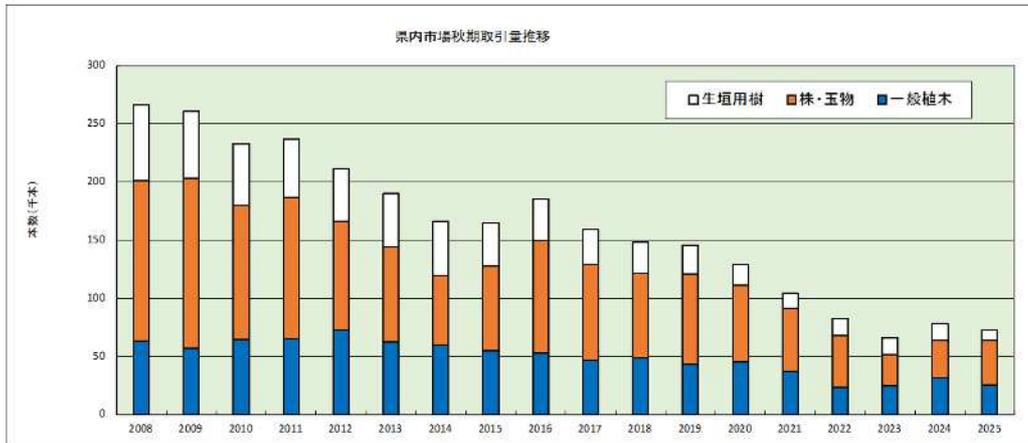


表－1 春期取引量上位10品目の動き

順位	2023			2024			2025		
	品名	区分	前期比	品名	区分	前期比	品名	区分	前期比
1	サツキ	株	...	サツキ	株	...	サツキ	株	...
2	ツツジ類	株	↘	オタフクナンテン	株	...	ドウダンツツジ	株	↑
3	サザンカ	生	...	ツツジ類	株	...	カエデ類	—	...
4	カエデ類	—	...	カエデ類	—	...	ツツジ類	株	...
5	ドウダンツツジ	株	...	シマトネリコ	—	...	オタフクナンテン	株	...
6	オタフクナンテン	株	↘	ドウダンツツジ	株	↘	サザンカ	生	...
7	イヌツゲ	株	...	イヌツゲ	株	↘	シマトネリコ	—	...
8	シマトネリコ	—	↓	サザンカ	生	↓	キンモクセイ	—	...
9	ヤマホウシ	—	...	イヌマキ	生	↑	イヌマキ	生	...
10	キンモクセイ	—	↑	キンモクセイ	—	...	ヤマホウシ	—	...

前期比 ... : ±20%未満 ↗ : +20%以上40%未満 ↘ : -20%以上40%未満
 ↑ : +40%以上 ↓ : -40%以上 — : データなし
 区分 — : 一般植木 株 : 株・玉物 生 : 生垣用樹

図－2 秋期取引量の推移



表－2 秋期取引量上位10品目の動き

順位	2023			2024			2025		
	品名	区分	前期比	品名	区分	前期比	品名	区分	前期比
1	オタフクナンテン	株	...	オタフクナンテン	株	...	オタフクナンテン	株	↑
2	サザンカ	生	...	サツキ	株	↗	サツキ	株	↗
3	サツキ	株	↓	サザンカ	生	...	シマトネリコ	—	...
4	キンモクセイ	—	...	シマトネリコ	—	↑	イヌマキ	生	...
5	カエデ類	—	...	カエデ類	—	↗	ヤマホウシ	—	↗
6	ヤマホウシ	—	↑	ソヨゴ	—	↑	サザンカ	生	↓
7	ツツジ類	株	↓	キンモクセイ	—	...	カエデ類	—	↘
8	イヌツゲ	株	↘	ドウダンツツジ	株	↑	ドウダンツツジ	株	↘
9	イヌマキ	生	↗	ヤマホウシ	—	...	キンモクセイ	—	↘
10	シマトネリコ	—	↘	イヌマキ	生	↗	ソヨゴ	—	↓

前期比 ... : ±20%未満 ↗ : +20%以上40%未満 ↘ : -20%以上40%未満
 ↑ : +40%以上 ↓ : -40%以上 — : データなし
 区分 — : 一般植木 株 : 株・玉物 生 : 生垣用樹

—調査研究の現場から—

愛知県植木センターでは、植木生産の効率化、技術の向上などを図るため、調査研究を行っております。ここでは、令和7年度に終了した課題の概要を紹介します。

1 老齢化・大木化した緑化木の問題点と管理方法について (令和5～7年度)

1 調査目的

緑化木は、植栽してからある程度経過すると、老齢化・大木化して、腐朽、倒木や枝の落下といったリスクが高くなります。また、病気や気象害等の影響を受けやすく、樹形や着花状況が悪くなり、本来の緑化木の役割を果たせなくなることが多くなります。

植木センターでも、開所（昭和61年、1986年）から様々な樹種が植栽されていますが、樹種毎に生育状況が異なっているため、その問題点と管理方法を整理することを目的とします。

2 調査方法

(1) 対象樹木

- ・ 植木センター内に植栽されている緑化木

(2) 高木の調査（樹形の作り直し）

- ・ クスノキ、ヒトツバタゴについて、主幹の2/3の高さで切断、枝の1/2の長さで剪定し、エンジュについては、強風により折れた枝の直下で主幹を切断
- ・ 切断・剪定後、樹勢の回復状況、病虫害・腐朽の有無を目視（写真）で確認（月1回程度）

(3) 低木の調査（枝葉の更新）

- ・ ツツジ、サツキ、コクチナシ、マサキ、トキワマンサクについて、年1～2回程度切り戻し剪定を実施
- ・ 切り戻し剪定後、樹勢の回復状況、病虫害・腐朽の有無を目視（写真）で確認（月1回程度）

(4) その他調査（枯死木）

- ・ 植木センター内に植栽されている枯死した樹木の病虫害、腐朽の有無を目視で確認

3 年度別計画

項目／年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	
1 高木の調査	←		→	
2 低木の調査	←		→	
3 問題点と管理方法の検討		←	→	
4 とりまとめ			←	→

4 調査結果

(1) 高木調査 (樹形の作り直し)

a クスノキ



R5. 3. 16



R5. 3. 21 切断・剪定



R7. 12. 23 現在

b ヒトツバタゴ



R5. 3. 16



R5. 3. 16 切断・剪定



R7. 10. 28 現在

c エンジュ



R5. 4. 16枝折れ



R5. 7. 12切断



R7. 10. 28 現在

(2) 低木の調査 (枝葉の更新)



マサキ R7. 6. 17 剪定



トキワマンサク R7. 6. 17剪定



サツキ R7. 6. 17 剪定



ツツジ R7. 6. 16 剪定



コクチナシ R7. 7. 14 剪定

(3) コクチナシの病虫害調査 (ツノロウムシ)



全 景



ツノロウムシの被害状況



すす病の被害状況



すす病の被害状況

(4) マサキの更新管理状況



全 景



近 景

(5) トキワマンサクの更新管理状況



全 景



近 景

(6) 老齢化や大木化して枯死した樹木

年度	樹種	本数	枯死の原因
R5	クロマツ	1	虫害 (マツクイムシ)
	ヒトツバタゴ	1	不明
	ハナミズキ	1	不明
	ギンヨウアカシア	1	不明
	キリ	1	不明
	モミジバスズカケノキ	1	不明
	シダレザクラ	1	不明
計		7	
R6	ベニガシワ	2	虫害 (カミキリ)
	ハシドイ	1	不明
	ハンノキ	1	不明
	ブッドレア	1	不明
計		5	
R7	テルモモ	2	虫害 (クビアカツヤカミキリ)
	サクラ (ソメイヨシノ)	1	危険木 (枝枯れ)
	トチノキ	1	不明
	ブルーアイス	1	不明
	フィリフィアオーレア	1	不明
計		6	
合計		18	

5 問題点

(1) 安全性の低下

樹木の老齢化や大木化により、幹や枝の腐朽が進行しやすくなり、強風、豪雨等による枝折れ、倒木の危険性が高まります。

これにより、公園、道路などの施設周辺では、人身事故や施設被害のリスクが増大します。

(2) 樹形・景観の悪化

樹木の老齢化や大木化により、枝が過密になり、日照不足や風通しが悪くなることにより枝枯れや偏った樹形となり景観が悪化します。

樹木にはそれぞれ、本来の樹形（自然形）があります。例えば、クスノキは大きく広がる樹冠、ツツジやサツキは低くまとまりのある株立ちが特徴です。

コクチナシについては、枝葉が適度に混み合いながらも内部に空間があり、均整の取れた形状が特徴ですが、本調査では枝葉の過密化により内部に空間がなく、不均衡な形状となっており、樹種本来の形態が失われるケースが存在しました。

(3) 病虫害等の被害の発生

樹勢が低下した老齢木は、病虫害の影響を受けやすく、今回の調査ではマツクイムシ、カミキリムシによる被害により枯死した樹種が確認されました。

また、コクチナシについては、ツノロウムシ、すす病の被害も多く確認されました。

6 管理方法の検討

(1) 高木の管理

定期的な樹木点検により、樹勢の低下や枯損した枝があれば早期に剪定をし、幹に病虫害、腐朽が見られる場合は伐採処理をし、必要に応じて更新植栽をすることが必要です。

一般的には、剪定は一度に強剪定を行わず、段階的な樹形の作り直しの実施が望ましいとされています。今回の調査で、クスノキ、ヒトツバタゴ、エンジュの剪定については、一度に強剪定を実施しましたが、樹形及び樹勢の回復が確認されました。

その他、主枝を切り戻すことにより、風害等のリスクを軽減し、安全性を確保することができます。

(2) 低木の管理

切り戻し剪定による更新管理を行い、枝の若返りを図ることが必要です。特に、生垣等の目隠しとしての効果がある樹木については、毎年、同じ高さで切り戻し剪定をされる場合が多く、切り戻した箇所が混み合い、内部の風通しが悪くなり、病虫害の被害にかかりやすくなります。枝の混み合いの解消と、通風を確保するためには、毎年、切り戻す高さを変えて剪定をするとともに、混み合っている箇所の枝の整理が必要です。

その他、樹種ごとの適正な剪定期期を守り、開花や景観に配慮し、定期的な切り戻し剪定により、樹勢の若返りを図ることで、枝葉の更新が進み、形状が安定しやすくなります。

7 まとめ

本調査では、老齢化および大木化が進行した緑化木を対象に、生育状況や剪定後の変化を調査し、その問題点と管理方法について整理しました。その結果、老齢化した樹木は幹や枝の腐朽が進みやすく、強風や降雨時に枝折れや倒木が発生するなど、安全性の低下が大きな課題であることが確認されました。

また、枝の過密化による日照・通風不足は樹勢の低下や病虫害の発生につながり、樹形の乱れによる景観の悪化も見られました。一方で、樹種特性を踏まえた段階的な剪定や更新管理をすることで、樹形の改善や枝葉の健全な再生が確認され、安全性及び景観の向上が図られると考えられます。

長期的かつ計画的な緑地管理を行うためには、樹木の状態を定期的に把握し、剪定による維持管理、切り戻し等による更新管理、植替え（植栽）による更新を適切に選択することが重要と考えられます。

【参考】

愛知県植木センターの樹木類の推移

植木センターは、全国有数の生産地を擁する本県の緑化用樹木生産者等の知識と技術の向上を図り、緑化用樹木の生産振興に寄与するため、昭和61年（1986）に設置された。

開所当時のパンフレットによると、木本類83科468種17,016本、草本（地被）類12科32種11,767本となっている。

また、1988年の植木センターの植物目録では、95科564種1005品種（内訳は、木本類（樹木類）83科524種、草本類14科40種）となっている。

現在は、数え方が当時と若干異なるが、生育できなかった種、新たに植栽した種等の変遷がありますが、ほぼ同程度の数量約550種、約24,000本を管理している。植木センター開所から40年を経過し、樹木はかなり大木になり、変化している状況が写真から確認ができる。



写真1（正門、1986年）



写真2（正門、2023年現在）



写真3
（センター上空からの空中写真1986. 6. 7）

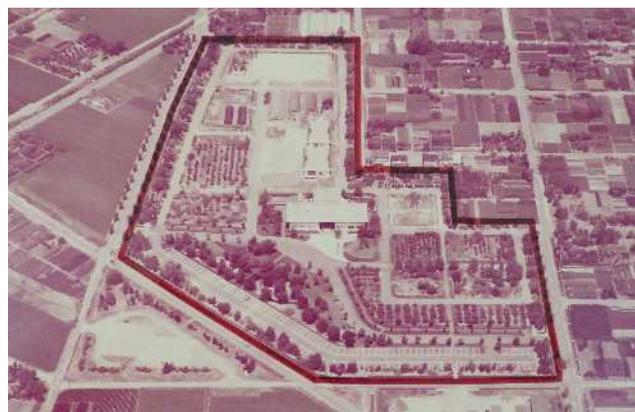


写真4（空中写真1991. 9. 25）

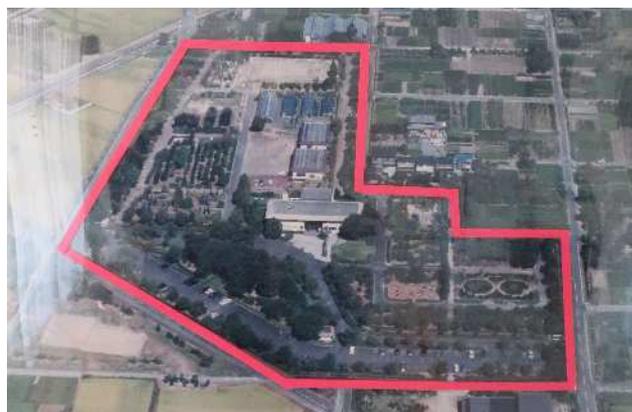


写真5（空中写真2003. 9. 30）

緑化木の主要害虫 No.39

ヘリグロテントウノミハムシ

甲虫目（鞘翅目）ハムシ科



成虫が葉裏を不規則に食害 H23.4.22 ヒイラギモクセイ



葉裏の表皮内に潜り込んで葉肉を食う幼虫 H23.5.19 ヒイラギモクセイ



幼虫(体長6mm) H23.5.19 ヒイラギモクセイ

右:羽化した成虫が出現し、主に葉裏を食害 H23.6.16 ヒイラギモクセイ



成虫(体長3~4mm) H23.4.11 ギンモクセイ



成・幼虫に食害された被害葉が茶変し、著しく外観が悪化 H23.5.24 ヒイラギモクセイ

1. 発生樹種

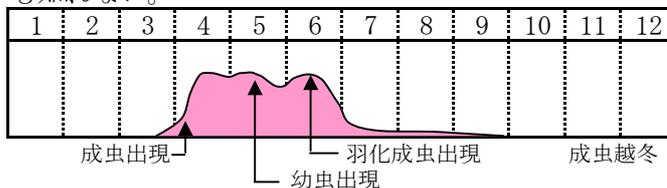
ヒイラギモクセイ、ギンモクセイ、ヒイラギ、ゴシキヒイラギ、フイリヒイラギ、イボタノキ

2. 害虫の特徴(発生時期、形態等)

4月上旬に成虫が現れ、数の増加とともに新葉の不規則な食痕が目立つようになる。5月中旬になると、成虫は少なくなるが、葉に産み付けられた卵が孵化し、葉裏や葉裏の表皮の内側に黄白色の扁平な幼虫が点在するようになる。5月下旬になると成虫、幼虫とも減少するが、地上に降りて羽化した成虫が出現する6月中旬には再び成虫が急増し、その後徐々に減少する。7月以降は点在する成虫を見かける程度となるが、暑さを避けるため葉かげに潜んでいるのかも知れない。

成虫は体長3~4mm、テントウムシのような形態で、全体黒く、二つの大きな赤斑がある。

触れると一瞬で消えるようにジャンプして逃げる。幼虫は黄色で、葉の内側に潜り込んで葉肉を食い、6mm程度まで成長する。



3. 被害の特徴

成虫が4月中旬から新葉の葉裏を食害し、食痕が茶褐色に変色するので非常に見苦しくなる。

5月中旬には、孵化した幼虫が表皮の内側に潜って葉肉を食うので、さらに茶変がひどくなり、著しく景観が損ねられる。この幼虫が土中で羽化して地上に現れる6月中旬には、ふたたび成虫による食害が発生するが、6月下旬以降の食害は軽微となる。

4. 対策

年1回の発生で、落葉下などで成虫越冬するので、冬季に落葉を清掃し越冬虫を撲滅する。

葉に潜入した幼虫には薬剤散布の効果は期待できないので、成虫の多い時期、特に越冬成虫が出現・加害する4月中旬~5月上旬の散布が効果的である。

若齢幼虫の食害により、葉の先端部分が枯葉色になり目立つので、分散する前に葉ごと摘除する。